

国際通貨としてのユーロの現状と展望

国際通貨研究所 福永 一樹

1999年に欧州統一通貨として導入されたユーロは来年10周年を迎える。欧州という大経済圏の通貨を一夜にして統一するという事業は、当初さまざまな懐疑論や楽観論によって迎えられたが、3年後の現金の導入や参加国の拡大を経て、域内の統一通貨として或いは周辺国経済に浸透した地域通貨としては、この10年おおむね安定した航海を辿ってきているとの評価が一般的だ。一方で、基軸通貨であるドルに並ぶ或いはドルにとって代わるとの一部の期待については、期待未達の成果に留まっており、国際通貨としてのユーロの位置づけは高まってきているものの、その変化は緩慢であり、また一部では既に停滞し始めているのが現状である。

本報告では、国際金融市場におけるユーロ建て取引に注目しながら、10年目を迎えたユーロの国際通貨としての現状を確認したい。具体的には、まずは1)参加国の拡大にともなうユーロ域の経済規模の拡大と、ユーロ導入を契機とする金融市場の統合・深化の状況を概観し、ユーロ建て支払いの起点となる貿易取引及び金融取引の現状を確認する。

次に2)ユーロ域周辺国経済においては、国ごとにばらつきはあるものの、貿易・金融取引において、また為替の媒介通貨として高い比率でユーロが使用されていることを検証し、地域通貨としてのユーロがユーロ域周辺国経済に浸透している現状を確認する。

その上で、3)グローバルなユーロの使用状況を、クロスボーダー・バンキング取引、国際債務証券取引、外貨準備に焦点を当てて把握したうえで、最後に国際的な債権・債務の決済機能におけるユーロの役割を確認するために為替媒介通貨としてのユーロの現状を検証する。グローバルなレベルでのユーロは、導入後数年で取引シェアを高めたもののその後の変化は総じて緩慢であり、また取引の担い手に地理的な跛行性が顕著に見られるなど、国際通貨としてはドルに対してサブの地位にとどまっている。

最後に4)国際金融市場としてのロンドン市場とユーロの関係に焦点を当てる。ユーロ域はロンドンに匹敵する国際金融市場を域内に有さず、その結果、ユーロ建て国際金融取引の多くの部分がユーロ非参加国である英国においてなされている。このことが国際通貨としてのユーロの発展可能性に及ぼす影響や制約を考える。